学級経営をこんな風に考えました

教育の目的は、子どもの人格形成である。この目的を達成するために３種類に分類してみた。

１．信頼：子どもの話を聞く・一緒に遊ぶ・個別指導するなどによって形成される。
仲良くはなるが「いうことは聞かない」「いやなことはしない」「勉強はやらない」
学習規律が徹底しない。スクールサポーターと子どもの関係がよい例である。

２．授業力：授業を通して子どもの人格を形成していく力とする。
子どもが先生を尊敬する。「先生はえらい」「先生はすごい」となる。
学習規律が徹底し、子どもの学習意欲も向上する。

３．管理力：恐怖と屈辱、人工的な権威、精神的抑圧で子供を管理する力とする。
「先生はこわいけど、やさしい」「先生は、やさしいけど、こわいときもある」
「飴と鞭」「力と餌」

そこで、学級経営全体を 100 として考えてみた。「信頼」は、「50」。これがなければ学級経営は考えられない。即、学級崩壊である。「信頼」もないのに「管理力」で子どもをおさえようとする先生は、論外である。あとの「50」をどうするかを考えてみた。

１．授業力：50
力は、全くいらない。子どもたちが、自主的、主体的に活動する。それを教師は、見守るだけでよい。

２．授業力：40　　管理力：10
生命にかかわる問題や人権にかかわる問題は、厳しく指導する。その他は、子どもに結論を出させる。これが、理想的な形と考える。あとは、授業力を 50 に近づける努力をすればいい。
授業力が、40 という事は、かなり素晴らしい授業ができるという事。

３．授業力：25　　管理力：25
まあ、普通のタイプ。「怒るが、ちゃんと面倒を見てくれて、やさしく接してくれる。授業もそこそこ楽しくて、わかりやすい先生」授業力の向上に努力すればいいが、年とともに、力に頼ろうとすると力に衰えを感じてダメになる。（年配の学級崩壊）

４．授業力：10　　管理力：40
いわゆる「怖い先生」。授業力がないので、力に頼ろうとする。高学年になるほど、大きな力が必要になる。

５．管理力：50
力だけで学級経営をする。「子どもの前に立つだけで、子どもが震え上がるような先生」。授業力がないので、学習も「がんばれ」だけである。力が、少しでも不足すれば、崩壊が待っている。

※授業力：10　　管理力：10　　信頼：30

まず、「信頼」を「50」に持っていかなければどうしようもない。
その上で、あとの「30」を何で埋めるか考える必要がある。「管理力」か「授業力」か。
この「30」の隙間を埋めないと、学級崩壊が起こる。

学級経営は、子どもとの信頼関係だけでは、成り立たない。信頼関係の上に「尊敬」を構築しなければいけない。その「尊敬」を何で獲得するか。

私は、「授業力」であると考える。